呼びかけ文

八世紀の終わり、桓武天皇は京都を都として定めた。この都市は、都と定められたときに喜び集まってきた人々から「平安楽土（平穏に安心して楽しく暮らせる地）」と歌い迎えられ、故に、平安のみやこ、平安京と名付けられた。そしてその正門として、羅城門が置かれた。

平安京は、その後千年以上我が国の都として栄え、幾多の危機を乗り越え、「世界遺産 古都京都の文化財（ 京都市、宇治市、大津市 ）」に代表される数多くの歴史的建造物を現在に伝え、世界最古の長編小説である「源氏物語」など日本文学史上珠玉の作品を数多く生み出し、茶道や華道、伝統的な芸能や美術、工芸といった日本の代表的な文化の中心地として、これらを生み出し、継承し、進化し、発信し続けている。

平安京は、当時のアジアの大国であった唐の都「長安」を模して造営され、都市全体が四角形で、中心北側に政治の中心「大内裏」を設け、そこから真っ直ぐ南に朱雀大路が貫き、左右対称の大路小路を配した条坊制の都市であった。手本とした長安がそうであったように、当時の世界情勢では都市を城壁で囲み（羅城）、外敵の侵入を防ぐ城塞都市とすることが一般的であったが、平安京は羅城を築かない世界的にも非常に稀な、外部に開かれた、いわば平和な都市であった。

そのうえで、平安京では、都に住まう人々のいのちや暮らしを戦火や疫病から守る精神的な象徴として、都の南端正面の入り口となる地に正門を建設した。羅城なくして住民のいのちと暮らしを守るという強い思いを込め、門のみにその機能を果たすべく仮託し「羅城門」と名付けたともいえよう。

以来、二度の倒壊を経て再建されることはなかったが、人々を守る、都の正門、といった精神的機能は人々の心に生き続け、儀式や凱旋といった歴史上の舞台となり、疫病や戦火のある異界とを区切る装置としての意識は、物語や絵画といった芸術・文化における感興を揺さぶり多くの作品として伝えられ、現代においても、黒澤明の映画「羅生門」のモチーフとされるなど、千二百年を経てなお、人々の心の中に生き続けている。

現在、私たちは、新型コロナウィルスの蔓延といった未曽有の疫病が全世界を覆い、環境問題や人権問題をはじめ政治的な緊張のなか、不安と混乱の渦中にある。

今、この時だからこそ、開かれた隔てのない平和な社会と、戦火や疫病から人々のいのちと暮らしを守る人類の精神的な象徴として、建築されてから千二百年以上、最後にその雄姿を示してから千年以上たった現代に、京都の地に「羅城門」を蘇らせようではありませんか。

２０２０年10月２０日

千 玄室
村井 康彦
有馬 頼底
松浦 晃一郎
土岐 憲三
冷泉 貴実子
西園寺 裕夫